

會員の頁

第23卷第6期 昭和12年6月

地方進出と街頭進出との新動向

會員 宮本武之輔*

本年4月10日から12日までの3日間に互り、京都市を中心として開かれた本會第1回年次學術講演會は論文の提出せられたものが90篇に餘り、出席會員數800名を超えて豫想外の大成功を収め大盛況を呈したことは誠に慶賀に堪へない。

時は陽春4月、地は平安の舊都、之に京都帝國大学土木教室、京都府、京都市、大阪市、神戸市、本會關西支部所屬の會員諸君の熱誠なる協力がある。正に天の時と地の利と人の和との3者を兼ね備へたことはこの學術講演會を成功せしめた最も有力なる原因であつたと考へられる。

私は親しくその學術講演會に列席してその盛況に驚くと同時に心からその成功を喜んだものであるが、今回の企こそは本會の新しい動向の一つとして極めて重大な意義を持つものである。

年次學術講演會は4年に1度東京に工學會大會の開かれる年を除いて、毎年1回づゝ全国各地に開催する豫定の本會の地方大會であつて、今回の第1回大會は實にその將來の成否を卜する瀬踏だつたと言ひ得る。而してこの種の地方大會こそは従來本會の活動が主として東京を中心として行はれたことに對して兎角の非難があつたのに聽從して、古い傳統を破つて本會に「地方進出」の新しい動向を興へようとする劃期的の試みである。その最初の試みが斯くも多大の成果を収めたと言ふことは期せずして本會の活動に對する會員の要望が如何なるものであるかを如實に顯現するものであつて、趣旨は地方大會であるに拘らず、北海道や滿洲の様な遠方から多數會員の参加があつたことは、本會「地方進出」の新動向が大多數の會員諸君の期待に副ひ支持を贏ち得る所以であることを痛感せしめる。この意味に於て私は京都講演大會の成功に二重の喜びを感じるのである。

次で本會が昨年の總會に於ける定款改正を契機として、東亞連絡委員會、同調査委員會、行政機構調査委員會、防空施設研究委員會、標準請負契約書調査委員會、技術者相互規約調査委員會などの各種委員會を設

けたことは、これも従來の傳統を破つて本會に「街頭進出」の新しい動向を興へるものである。

東亞調査委員會では東亞各國からの留學生誘致を目的として交通大学の設立を計畫し、既に同大学の学期に關する審議を終つたのであるが、最近に於て東亞連絡委員會がその意義ある使命を果す絶好の機會に恵まれたことは、従來東亞部に對して多大の關心を持つて來た私としては喜に堪えない。

即ち5月7日中華民國全國經濟委員會水利處の簡任技正汪胡楨君を團長とする7名の河川工事關係の技術者が來朝せられたこと、一行の視察日程の作製その他の斡旋は先方からの依頼狀によつて本會が之に當つたこと、10日の夜東京會館で本會主催の一行歓迎晚餐會が開かれたこと、一行は陪京の翌日から、本會からの依頼に基づく、内務省、鉄道省、北海道廳、朝鮮總督府、關係府縣及市、並に水力電氣會社の好意ある斡旋によつて全国各地の視察を始めたことなどは本會東亞部の事業として特筆せらるべき欣快事である。

汪團長始め一行の大部分は米國大学の出身者であつて、我國へ來朝するのは今回が始めてであると言ふ。汪團長及黃河水利委員會の萬善君は何れも簡任技正であつて、日本流に言へば助任技師である。斯くの如く中華民國に於て樞要の地位を占めた水理技術者の一行が、特に我國の河川、灌漑、水力發電などの工事を視察する爲に來朝して日本内地及朝鮮に互つて1.5~2箇月の長期の旅行をすると云ふことは恐らく空前の事例であらう。而もその一行が何れも相當のエキスパートであるが爲に各視察箇所での質問なども剴切を極め、微細な點までも究明して已まない熱心ぶりは誠に愉快である。

私は昭和10年10月東洋工業會議代表の一員として上海、南京、青島、天津、北平の各地を歴訪し、多數の中華民國官民諸君と會議や招集の卓をともにした。その旅行は所謂日華親善の要諦に就て私に多くのことを教へたが、就中日華親善は兩國の經濟提携、文化提携を先驅としなければならないと言ふ動かし難い信條を私に與へた。その爲には兩國國民の接觸と理解、別しても學者、技術者、藝術家その他の文化人の交換視察が目的達成上の必要條件である。日本の有識階級が親しく中華民國を視察してその理解を深めることが必要

* 内務技師 工学博士 内務省土木局第2技術課勤務

であると同じく、中國の有識階級が自ら日本を視察してその理解を高めることも亦必要である。

我國と中華民國とは古い東洋の精神文化の基礎の上に繋がれた國家ではあるが、國民新生活運動に統制せられて舊套をを脱却しようとしてゐる「青年支那」を理解する日本人が少く、また明治維新の閉國以來70年の短い年月の間に歐米先進國に劣らない燦然たる文化を建設し得た「躍進日本」を熟知する中國人が少い限り、國民政府の要人が口辭にする所謂互信互敬、相互の理解の上に立つ親善提携は到底望み得ない。

日華國交の調整は數年來の懸案であり、難關である。之に對する我國の行き方は先づ問題を政治的、外交的に解決することから出發しようとしてゐる様に見受けられる。それもまた結構であり、中には先づ政治的解決を図るのでない限りは處理し得ない事柄も少くないことは之を認める。但しさうした問題を別にしても兩

國民が互に袂を脱いで經濟的に提携し、文化的に提携し得る餘地がない譯ではない。否却つてさうした國民相互の經濟的または文化的提携が兩國外交の政治的または外交的調整を促進する所以に外ならないことを私は確信する。

この意味に於て今回中華民國からの水理技術者の來朝を迎へたことは意義の極めて深いものがあり、日華親善の上の効果甚大なるものがあるのを思ふときに、私は押へても押へ切れぬ喜びを感じるのである。

一行の訪日に關する照會と信賴とが外務省などの手を経ないで直接本會に爲されたに就ては本會に東亞部が設けられたことが唯一の機縁である。それを思へば本會の「街頭進出」の新しい動向もまた決して無意義でなかつたことが了解せられるのであつて、中華民國の訪日技術者一行を迎へて、こゝでもまた私は二重の喜びを感じる。